

上級の新聞クラス

(2006年3月1日実施)

日本人の方々に入っただいてのディスカッションのクラスを今年も行いました。この授業は2年または1年半の間「T I J」で日本語を勉強した学生たちが卒業を前にして行っているもので、新聞記事を使い、問題点を共有したあと少人数のグループにわかれて分かれて日本人の方も交えてディスカッションをするというものです。学生たちにとってアルバイトや日常会話のためでなく自分の考えを日本人と述べ合うような機会には実際には少ないようですので、日本語の勉強の集大成としてふさわしいものだと思います。

今年は「国際結婚」について取り上げました。このところ日本では国際結婚が増え、「T I J」の学生や卒業生にも国際結婚をした方がたくさんいます。授業は

新聞の記事を読み、「国際結婚」が増えている実態や背景、考えられる障害や困難を知る外国人を結婚相手として考えられるか、自分の場合はどう考えるかを話す

国際結婚は「障害や困難を考えるとやめた方がいい」、「別に問題はないからしてもよい」のどちらかの立場に決めて日本人の方を含めて6, 7名のグループに別れて話す、という手順で進めました。

で新聞の記事を前にした学生たちは予想以上に国際結婚が多いことに驚いていました。

についてはほとんどの学生が「考えられる」という方に手を挙げ、現代の若者だと改めて感じました。については後者のグループが多く、前者のグループに入ったのはどちらかという物事をよく考える慎重なタイプが多かったようです。

私が入ったのは後者のグループでしたが、話し合っているうちに障害や困難の大きさに話が深まっていきました。しかし、結局そのような障害や困難は国際結婚に限ったことではなく同国人同士の結婚でも考えられるものであり、それらを克服する覚悟ができないのであれば結婚などするべきではない、というところに落ち着きました。一方、文化の違いなどが楽しめるならば普通の結婚より喜びも大きく、絆も強いのではないかという意見も出ました。日本という外国へ来て生活しているうちに文化の違いを少し余裕を持って受け止められる状況になってきたのだと感心しました。

終わった後の「毎週こうやって(先生ではない)日本人の方が入ってくれたら楽しいのに」という学生のつぶやきが印象的でした。学生たちのいきいきと日本語を話す姿を見て、言葉はその国の人とコミュニケーションするために学ぶのだということを改めて感じさせられる授業でした。参加してくださった皆様ありがとうございました。

(市川さゆり)

公開授業研究会に参加して

3月1日、上級の新聞クラスの公開授業に参加させていただきました。卒業間近な若者と話をするのが楽しくて、昨年が続いての参加になりました。今年のテーマは「国際結婚」。

クラスは、盛り立て役がいることもあってか、いい雰囲気できていて、お互いを良く知っているようでした。記事の切り貼りを学生が音読し、簡単なQ & Aをしながらいろいろな話をしていき、最後に、賛否別のグループに分かれて話し合い、話されたことを報告。外からの参加者はグループに分かれるところで、話し合いに加わります。授業の最初、学生は緊張気味で、音読にも再度挑戦、などとやっているうちに、「日本の女性は控えめで優しいので、外国人には人気があります」など、えっ、いつの時代のイメージ？というような発言も飛び出し、いつものペースが出てきたようでした。

私は国際結婚もよし、の立場でしたが、反対の意見が聞きたくて、少数派のグループに加わることにしました。国際結婚に反対という彼らは、頑ななのではなく、よく考えているという印象を受けました。親が反対しているし、年をとった親の面倒をみたい、異文化を背景にしているので微妙なところまで言葉が通じない、住むところによってどちらかにプレッシャーがかかる、子どもがかわいそう、など色々な意見が出ました。それに対し、同国人同士だって微妙なところまで分かり合えるというものでもなく、かえって分かり合うのが難しいという前提があるほうが一生懸命で話そうとする、とか、異文化だからというが、日本人といっても海外在住経験が長い人もいて、日本文化は固定的で1つしかないわけではなく多様だ、などと別の見方があることを説明しているうちに、国際結婚というテーマは、実は異文化共生ということをぎりぎりのところで考えることなのだと思えてきました。異文化は微妙なところでは分かり合えないものなのか、言葉を極めないで分かり合えないのか、いや、言葉を尽くせば分かり合えるというものではなく、別の仕方信頼しているということもあるのではないかとか、住みにくさや子どもの問題は国際結婚というより、周囲の受け入れ方の問題ではないのかなどと色々考えさせられました。留学生として日本で生活することを選んだ彼らは、実は、この日話し合った壁と可能性をすでに引き受けている人たちなのではないでしょうか。ボランティアとして日本語教室をやることは、そんな彼らの可能性のほうに一緒に希望をつなごうとすることであるように思います。

(福田はるみ)

学生の感想

今回は日本語教育関係に携わる日本人の方々を招き、国際結婚というテーマについて討論する授業でした。こういう形の授業は私たち学生にとって初めてですので、皆活発に自分の意見を述べ、爽やかな雰囲気に包まれた授業でした。日本人とお話し合いすることができて、非常によかったと感じた学生が殆どでした。

討論は国際結婚ということはどう受け止めるかどうかをめぐって展開し、賛成派と反対派の二つのグループに分かれて、それぞれ討論を戦わせました。賛成派は愛している相手が外国人であっても、気にせず結婚したいとっていて、今後母語の相違によるコミュニケーション上の支障も克服できると信じていると述べました。それに対して、反対派は国際結婚の考えは自分にとっては受け止めるのが難しいものであり、相手を探して行くうち

に、この選択肢を避けるようになると主張しました。異なった文化背景や生活習慣の中で育った二人の結婚生活が絶対にスムーズに進むとは確信できず、結局、言葉の障壁を乗り越えられるかどうかということを中心に盛り上がっていきました。

そこで留学生である私が最も強く感じたことがあります。結婚に迫られていない学生である私達にとって国際結婚という話題は身近ではなく、ピンとこないと感じた人が殆どかもしれません。しかし、今回の授業をきっかけにして、実際に外国に生活している留学生である私達は、日本人や韓国人といった外国人に接触していくうちに、相手をどのように感じているのか、結婚まで考えているのかを深く考えるようになると思います。今回の公開授業は、日本人の方々とよく話し合うことで、日本の方の意見を知ることができて、とても勉強になりました。

(2006年3月 TIJ 卒業生 秦 康)